◆台東区基本構想 検証シート

文　化

基本理念	下町文化の継承と発展
将来像	Ⅰ　にぎわいと活力のまち
基本目標	３　文化が息づく豊かな生活の創出
	台東区では、史跡、芸術、芸能など、多彩で豊富な文化資源が集積し、現在に伝統や生活文化が息づいています。そして、文化と産業・観光が密接に関係しています。 台東区は、この文化の力を活かして、快適で豊かな環境を創りだしていきます。 この基本目標を実現するために、歴史、伝統、生活に根ざした文化を継承し発展させて、時代を先導する文化を創造し、国内外へ発信していきます。そして、文化と産業・観光の連携を推進し、両者の融合・一体化によって総合的な文化の力と経済力を育んでいきます。

小　柱 施策名称	長期総合計画【平成１７年度～２６年度】 検証結果 抜粋 （１０年間の主な成果・課題）
（１）文化の継承と発展	
文化の検証と保存、活用 【生涯学習課】	・文化財台帳への登載や文化財講座等の開催により、幅広い文化資源の保全や活用を行っている。 ・台東区にゆかりのある文学に区民が触れられるよう、池波正太郎記念文庫の内容の充実を図り、平成24年度には浅草文庫を開設した。 ・台東区映像アーカイブについては、順調にアーカイブ化を進めているが、映像資料については劣化等による滅失のおそれはますます高まっていくので映像資料の収集をさらに進めていく必要がある。
文化を学ぶ機会の充実 【生涯学習課】	・伝承遊びの普及や和楽器の指導など、生徒児童に対する伝統文化を継承する教育環境づくりが進んでいる。 ・下町風俗資料館での昔あそびの実演や、平成22年度から開始した台東区子ども歴史・文化検定の実施等により、身近に地域の文化を知り、学ぶ機会を提供している。特に、子ども歴史・文化検定については、受検者数が徐々に増加しており、子ども達が文化に触れる機会は着実に広まりつつあるので、今後も一層の推進が必要である。
（２）新たな文化の創造と発信	
新たな文化の創造 【文化振興課】	・平成21年度より進めていた朝倉彫塑館の保存修復工事は平成25年度をもって終了し、計画通り開館した。 ・現在、国重要文化財である旧東京音楽学校奏楽堂の保全について、保存活用計画の策定を行っている。 ・区内で芸術文化活動を行う芸術家等を支援することで区の芸術文化の発展に努めている。先駆的で新しい企画と、地域に密着した企画を両立させた支援の充実を図る必要がある。
文化情報の蓄積と発信 【文化振興課】	・平成18年度に開設した文化専門ホームページを通じて、台東区の多彩な文化情報を発信しており、記事掲載件数・ホームページアクセス件数も順調に推移している。 ・他区に先駆けて実施しているフィルム・コミッションは、豊富な地域資源を有効に活用し、国内外にむけ、本区の魅力を効果的に発信している。 ・平成19年度からの世界遺産登録推進活動を通じて、区民の地域文化への愛着心醸成や国内外への情報発信を行っている。引き続き、登録実現に向けて取り組む必要がある。
（３）文化の力と経済力の育成	
文化資源を活用した産業の振興 【産業振興課】	・文化と産業が密接な関連を持つ本区の特徴を活かした創業支援施設デザイナーズビレッジ（平成16年度開設）や浅草ものづくり工房（平成21年度開設）を運営していく中で、新たなものづくりの地域文化が芽生えつつある。
文化資源を活用した観光の振興 【観光課】	・本区の文化資源等を活かした新たな観光コースを設定したガイドマップの作成をはじめ、海外の旅行エージェントやマスコミを招聘し、実際に各種の文化体験をしてもらうなど、本区の魅力を様々な形でPRすることで、観光客の誘致に努めている。

小　柱 施策名称	施策評価【平成２７年度・２８年度】 結果 抜粋 （２年間の主な成果・課題）
（１）文化の継承と発展	
地域文化の保存と継承 【生涯学習課】	「したまち台東芸能文化連絡会」と連携した演劇・漫才等の実演によるPRを実施するほか、実演芸能を記録したDVDの制作・活用など、区民が芸能文化に触れる機会の創出を図っている。重要な歴史的建造物の保存・継承では、旧東京音楽学校奏楽堂の大規模改修は順調に進んでおり、また、国立西洋美術館については、28年7月に世界文化遺産登録を実現することができた。 施策の指標の区民文化財台帳登載件数は、行政計画事業量を上回っており、10年後のめざす姿である「大切な地域文化における次世代への継承」に向け、着実に進んでいる。
地域文化の活用と発展 【生涯学習課】	子供たちに郷土の歴史・文化の伝承を図り、郷土を愛する心を育むため、「台東区歴史・文化テキスト」を配付するほか、「台東区子供歴史・文化検定」を実施し、多くの小中学生が受検している。さらに、区に伝わる民話や伝承遊びを伝えることで生まれ育った郷土をよく知る機会を提供している。 文化施設及び池波正太郎記念文庫では、各施設の特色を生かした人物・芸術・文化等を公開し、地域の文化に親しむ機会を提供している。施策の指標である台東区民話と伝承遊び普及参加者数及び区立文化施設の来館者数は、26年度と比較し、いずれも増加しており、区民の地域文化に対する理解が深まることに対し、成果が得られている。
（２）新たな文化の創造と発信	
新たな文化の創造 【文化振興課】	区の芸術文化振興のため、芸術文化支援制度により若手や先駆的な芸術文化活動を行う芸術家等の支援育成を行っているほか、区長賞等の受賞作品を広く公開し芸術家をPRするとともに、区民が芸術文化に触れる機会の充実を図っている。 たなか舞台芸術スタジオは、利用率、新規登録団体数ともに増加し、演劇・芸能等の公演に向けた稽古場として十分に活用されている。 映画祭及び演劇祭は、今後、より区民・地域の関心を高め、親しんでもらえるよう見直しを行うとともに、大衆芸能等を含めた文化資源を最大限活用した新たな展開を図っていく必要がある。
文化情報の蓄積と発信 【文化振興課】	文化専門ホームページでは、学術機関と連携し外国語にも対応した記事を掲載する等充実を図り、区が持つ豊富な文化資源を国内外へ広く発信している。芸術文化関連施設情報を発信するサイトを開設するなど、区内での芸術文化活動の支援や芸術文化関連施設の利用促進に取り組んでいる。 ステージ・コミッションでは、「たなか舞台芸術スタジオ」を開設し、稽古場支援を充実させるとともに、「台東区フィルム・コミッション」と一体となったサイトを開設・運用する等、他の事業とも連携したPR機会の充実により、着実に成果を挙げている。
（３）文化の力と経済力の育成	
文化資源を活用した産業と観光の振興 【文化振興課】	中小製造業のアトリエ化支援等は、区内のものづくり産業の活性化を図るとともに、「ものづくりのまち台東」を区内外にPRし地域のイメージアップにつながっている。 映画祭や演劇祭は、かつての興行街や大衆芸能発祥の地といった文化的なイメージを活用し芸能文化の魅力を発信してきたが、今後は、より区民・地域の関心を高め、親しんでもらえるよう見直しを行い、豊富な文化資源を活用した新たな展開に取り組んでいく必要がある。また、体験型観光の情報発信を強化していくなど、文化と産業や観光とが連携した取り組みを一層充実していく必要がある。

◆台東区基本構想 検証シート

文　化

基本理念	下町文化の継承と発展
将来像	Ⅰ　にぎわいと活力のまち
基本目標	３　文化が息づく豊かな生活の創出
	台東区では、史跡、芸術、芸能など、多彩で豊富な文化資源が集積し、現在に伝統や生活文化が息づいています。そして、文化と産業・観光が密接に関係しています。 台東区は、この文化の力を活かして、快適で豊かな環境を創りだしていきます。 この基本目標を実現するために、歴史、伝統、生活に根ざした文化を継承し発展させて、時代を先導する文化を創造し、国内外へ発信していきます。そして、文化と産業・観光の連携を推進し、両者の融合・一体化によって総合的な文化の力と経済力を育んでいきます。

（４）文化的なまちづくり

地域特性を活かしたまちづくり 【まちづくり推進課】	・平成23年度の景観行政団体移行に伴い、景観計画を策定し、地域ごとの基準を定めることで、地形・文化・歴史など地域特性を活かした景観まちづくりの更なる推進を図っている。 ・まちづくり協議会数は増加しており、区民主体の自主的なまちづくりを支援することを通じて、地区それぞれの個性を活かしたまちづくりが進められている。 ・区民主体のまちづくりを進めるには時間を要するため、長期化する活動への支援のあり方を検討する必要がある。
だれもが文化を享受できる環境づくり 【企画課】	・子どもの文化教育の充実については、演劇・音楽鑑賞教室における能、狂言等の鑑賞を通じて、児童・生徒の鑑賞態度の体得、伝統文化の学習、情操の涵養に効果を上げている。 ・障害者自立支援センター、障害者デイサービス、障害者団体における絵画、音楽をはじめとする各種文化的活動を通じ、障害者の自立、社会参加の促進を図っている。

（５）区民、芸術家等との連携の確立

区民、芸術家等との連携の確立 【文化振興課】	・平成１９年度から3ヶ年実施した上野タウンアートミュージアムや、平成２２年度から実施したGTS観光アートプロジェクトなどの東京藝術大学との連携事業や、学習支援ボランティアを通じて、地域の教育機関や区民等が関わる文化活動を実施している。 ・ボランティアスタッフの活用については個々の文化施設で実施しているものの、区民、芸術家、企業など文化に関わる人々が互いにその活動を支援する文化ボランティアの創設にはいたっていない。

＊施策名称【】内は施策の主管課（平成25年度検証時）

（４）文化に親しむ環境づくり

文化に触れる機会の充実 【文化振興課】	東京藝術大学と協定に基づく連携事業を行い、さまざまな分野で事業を展開している。区立文化施設では、各館の特色を活かした企画展示等サービス向上に取り組み、台東区ゆかりの人物・文化等を広く公開し区民が文化に触れる機会の提供・充実に成果を挙げている。 子供や障害のある方に、教育活動や社会生活訓練プログラムを通じて文化に親しむ機会や表現活動の場を提供しているほか、良好で美しい街並み形成に向けた景観まちづくりを推進するため、景観重要建造物等の指定方針に基づき、所有者の意向を伺いながら指定を進めている。

＊施策名称【】内は施策の主管課（平成29年度現在）

＜参考指標＞　＊「目標（36年度末）」は、長期総合計画（平成27年3月）で設定している達成目標

施策の指標			
指標名	１６年度	28年度	目　標 （３６年度末）
区民文化財台帳登載件数	累計145件	累計220件	累計257件
台東区民話と伝承遊び普及参加者数	年1,753人	年2,563人	年3,000人
区立文化施設の来館者数	年19万4,033人	年15万8,561人	年18万5,500人
ヴァーチャル美術館アクセス件数	年10,499件 （18年度）	年40,238件	年15,000件
稽古場利用率 （開館日数に対する利用日数）	―	99.1%	90%

施策の指標			
指標名	１６年度	28年度	目　標 （３６年度末）
文化専門ホームページ 「文化探訪」アクセス件数	年613,185件 （20年度）	年106,681件	年95万件
アトリエ化支援助成件数	累計21件	累計80件	累計110件
映画祭の来場者数	年9万人 （20年度）	15万人	20万人
演劇祭の来場者数	年2万人 （22年度）	13万人	15万人

◆台東区基本構想 検証シート

文　化

基本理念	下町文化の継承と発展
将来像	Ⅰ　にぎわいと活力のまち
基本目標	３　文化が息づく豊かな生活の創出
	台東区では、史跡、芸術、芸能など、多彩で豊富な文化資源が集積し、現在に伝統や生活文化が息づいています。そして、文化と産業・観光が密接に関係しています。 台東区は、この文化の力を活かして、快適で豊かな環境を創りだしていきます。 この基本目標を実現するために、歴史、伝統、生活に根ざした文化を継承し発展させて、時代を先導する文化を創造し、国内外へ発信していきます。そして、文化と産業・観光の連携を推進し、両者の融合・一体化によって総合的な文化の力と経済力を育んでいきます。

区の総括意見	台東区固有の文化を調査し、保存すると同時に、演劇・漫才・落語などの実演芸能をDVDに記録、保存するなど、新たに文化資源を掘り起こし、活用を図った。そして、文化施設や図書館での展示公開など、文化に触れる機会を提供することで、次の世代に引き継ぐとともに、「台東区子供歴史・文化検定」等を実施し、郷土を愛する心を育むための取り組みを行った。国立西洋美術館については、地域や国・東京都などの関係諸機関と連携しながら、情報発信や普及啓発活動に取り組んだことにより、世界文化遺産への登録が実現した。また、台東区の個性豊かな文化資源を活かしながら、芸術・芸能文化活動を支援、育成することにより、新たな文化の創造を図るほか、区が持つ多彩な文化資源の情報を収集、把握し、文化専門ホームページの充実など、時代に合わせた発信手法で国内外へ発信した。 総合的な文化の力と経済力を育むため、伝統工芸品などの歴史的なものづくり文化を活かす取り組みや、文化体験型観光メニューの提供など、豊富な文化資源を産業や観光の経済活動に活かす取り組みを行い、産業の競争力を高め、にぎわいと誘客を促進した。 あらゆる立場の区民が等しく文化を享受できるよう、地域の特性を活かした文化的なまちづくりを進めるほか、東京藝術大学との連携事業や、子供には鑑賞教室を通じて文化に触れる機会を提供するなど、文化に親しむ環境づくりに取り組み、区民の主体的な文化活動への参加・支援を促進した。 これらの取り組みにより、『文化の力を活かして、快適で豊かな環境を創りだしていく』ことをめざす基本目標の実現に向けて、着実に進んでいる。 課題としては、区民が文化の担い手として、区内で実施される様々な文化活動に主体的に取り組むとともに、芸術家や文化活動を支える環境づくりをさらに進める必要がある。 文化の祭典でもある2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催は、日本の文化・芸術の魅力を世界に向けて発信する絶好の機会である。この機運醸成を踏まえた文化・芸術の取り組みの発信を一過性のものとせず、2020年及びその先までを見据え、国内外に向けたPR展開を図る（仮称）台東区文化プログラムを積極的に推進する必要がある。

学識経験者からの意見	国立西洋美術館の世界文化遺産登録は、さまざまな意味において慶賀すべきことであり、基本目標の実現に大きく貢献したが、いったんその役割を終えた事業として理解するべきであろう。文化財調査や台東区子供歴史・文化検定など、地域の生活に根ざした事業が、世代を横断しながら地道に継続され、しかも一定の成果をあげていることは、きわめて心強い。観光や娯楽等の目的で、一時的に滞在する来街者より、現にこの場所で生活している区民のほうが、信頼のおけるパートナーであり、「ここで暮らす」ことから得られる喜びや誇らしさがあってはじめて、それが来街者に対する心からのおもてなしやアピールにつながっていくと思われる。 映画祭と演劇祭について、区民への訴求力がかならずしも強くはなかったという総括がなされていることは、やはり無視するわけにはいかない。戦前のモダニズム時代から戦後、テレビが普及するまでの浅草が、大衆文化の中心地として誇示しえた過去の栄光を再び取り戻す、といった印象が、区の意図とは関わりなく、区民の間で一人歩きしてしまったということも考えられる。いずれにせよ、区民生活にとっては、リアリティを感じることができなかったがゆえの関心の低さという理解で、そう大きく間違っていることはないであろう。これらのイベントを継続するにあたっては、「いま・ここ」の区民生活と密着した観点やストーリーを設定し、それをわかりやすく提示することが喫緊の課題である。 それぞれの施策や事業は、「対内的－対外的」という空間的指向性を一方の軸に、「過去－未来」という時間的指向性を他方の軸にとった座標系のどこかの地点に位置づけることができるはずである。このような全体像を視覚的に俯瞰することができる図式があると、区民にとっても、ひとつひとつの取り組みを基本目標と関連させながら意味づけることが容易になるのではないか。基本目標の実現という観点からするならば、この座標系において、もっとも慎重な配慮を要するのは、「過去×対外的」の領域に位置づけられる事業であろう。座標の原点、すなわち区民生活の「いま・ここ」からもっともかけ離れており、区民としても、リアリティを実感することがなかなか困難な領域が、まさにそこだからである。江戸下町伝統工芸館の運営や映画祭・演劇祭についても、この座標系に当てはめ、イベントの成果を検証するべきであろう。 国立西洋美術館の世界文化遺産登録を契機に、「したまち」「ものづくり」「大衆文化」といった昭和レトロ的な文脈とは明確に異なる「美術都市」としての顔が再発見され、注目を集めつつあるように思われる。区長賞授与作品数、またヴァーチャル美術館での公開件数の増加傾向からも、ある程度それは裏づけられるだろう。他方、映画祭や演劇祭に対する区民の関心が、残念ながらそれほど高くないとするならば、あるいは、区に対する区民のセルフイメージの核心には、もはや美術というハイカルチャーがその位置を占めているということも十分に考えられる。もとよりこれは、区民の意識調査を体系的に実施するなど、より精緻で詳細な検証を踏まえて判断するべきことであるが、その結果によっては、先に触れた昭和レトロ的な文脈をあえて後景に退かせてでも、再び脚光をあびるようになったこの美術都市としての側面を重点的にプッシュしていくという計画方針もありうるのではないか。